In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	所在文の広がり ： 存在文との対応
Author	丹羽, 哲也
Citation	文学史研究. 55 巻, p.1-16.
Issue Date	2015-03
ISSN	0389-9772
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学国語国文学研究室
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

所在文の広がり ― 存在文との対応 ―

丹羽哲也

一　所在文と存在文

「AはBにある」という文と「Bに(は)Aがある」という文は、同じ事柄を表しながら焦点の位置が異なる。

（1）時計は机の上にある。　（所在文）

（2）a　机の上には時計がある。

　　b　あ、机の上に時計がある。　（存在文）

（1）はニ格項に焦点があり、（2）はガ格項または文全体に焦点があるという点で、言い換えれば、ガ格項の指示物の存在を前提とするか、その存在を主張するかという点で対立する。本稿は、この前者のタイプを「所在文」、後者のタイプを「存在文」と呼ぶことにする。[注1]

所在文についての先行研究は乏しく、この（1）のような具体物が具体的な場所に存在することを示すタイプに言及するのが専らである。[注2]しかし、この種の文には、（3）のように何らかの抽象的な関係を表すものも多く、

（3）妻は深い眠りの中にあった。　（02／5／29／朝）[注3]

かつ、例えば（4）のように焦点の置かれる項がニ格でないものもある。

（4）階段は463段あると言われ、息が切れます。　（08／7／14／夕）

（1）は事物がどこに存在するかということを表すが、（3）や（4）は事物がどのような形で存在するかという抽象的な位置づけ、存在のありようを表す。本稿は、後者のようなものも含めて所在文と呼び、これが個々にどのような関係を表すか、ニ格項やガ格項の名詞の違い、あるいは、存在文との対応の仕方に着目して分類することを目的とする。以下、ニ格項その他、場所に当たる要素を位置項、ガ格項を存在物項と呼ぶこともある。また、位置項の名詞およびその指示対象をB、存在物項の名詞およびその指示対象をAで表すことも多い。なお、「ある」と「いる」の選択の問題には立ち入らない。

二　所在文の諸タイプ

二・一　場所型と時間型

最も基本的な所在文、つまり具体的な場所における存在を表すものを「場所型」の所在文と呼ぶ。これは、存在物Aが（1）のような具体物であるものだけでなく、次のように抽象物であるものもある。

（5）本当の日本の魅力は地方にある。　（08／10／10／朝）

（6）重傷や死亡に至る事故情報は医療現場にある。（08／7／20／朝）

これらに対して、Aが出来事の場合は、周知のように、Bがデ格で表される。

（7）開会式は鳴門市のオロナミンC球場であり、34校が参加。（08／7／12／朝）

一方、位置項Bが時間である場合を「時間型」と言う。

（8）同庁によると、戴冠式は8月1日にある。（08／5／29／朝）

（9）数学の授業はたいてい1時限目にある。（08／6／16／朝）

（10）明暗を分けるドラマは試合終了後にあった。（01／1／6／朝）

これらは「戴冠式」「数学の授業」「ドラマ」の生起する時間や順序関係をニ格項で示している。時間の指定は無助詞の場合もあり、また、「Bから／まで」で始発点・終結点を表すこともある。

（11）会議はあすφある。

（12）除幕式は10日午前5時（同9日午前10時）からあり、（02／2／9／朝）

なお、場所と時間が両方顕在すること（場所型と時間型の相乗り）もある。

（13）決勝は11月1日に東京・国立競技場である。（08／1／25／朝）

存在表現は状態性の表現であることが基本であり、本稿で見る所在文も、抽象的なものも含めて大抵は状態を表すが、Aが出来事でBが場所や時間であるものは、述部が動作性である。（7）以下の例は、述語の「ある」を「行われる」に置き換えることができ、（8）（11）（13）はその基本形が未来を表す。

二・二　抽象場所型

「抽象場所型」というのは、ガ格項Aの事物がニ格項Bの事物の表す抽象的な領域の中にあったり、あるいは、AがBの影響下にある、AがBの基盤の上にあるなどといった、Bが抽象的な場所に位置づけられる関係を表すものである。

（14）子孫の将来は、現在の有権者の想像力のなかにある。（04／1／5／朝）

（15）［先］4五歩と仕掛けて桂を跳ね［先］3七角と行くのは谷川の構想にあったのだろう。（01／6／10／朝）

（16）逆境の中で生きていく力を磨く、そのひな型は、物語の中にある。（08／7／23／朝）

（17）日本の農業の計は予算案にある。（96／12／22／朝）

（14）（15）は、Bが「想像力」「構想」という心理的な領域、（16）（17）は「物語」「予算案」という表現の領域を形成し、Aがその中に存在することを表す。また、次のような現実の領域とでもいうべきタイプもある。

（18）書は元来、人びとと共に人間生活の中にあった。（00／1／12／夕）

（19）物事はすべて関係性の中にある。（04／9／19／朝）

「書」が「人間生活」という領域、「物事」が「関係性」という領域内に存在することを表す。（14）～（19）はAがBに包摂される関係にあり、多くは「の中に」という言葉でそれが示されるが、（15）や（17）のようにそのような形を取らないものもある。

抽象場所型には、「AはBの〔下／上／外〕にある」などの関係にあ

るものもある。

（20）自衛隊は米国の核の傘の下にある。（02／6／4／夕）
（21）日本では空港は国土交通省の監督下にある。（01／1／22／朝）
（22）その創造性や高品質は日本の長い漫画史の蓄積の上にある。（08／8／4／朝）
（23）10以上あるネット専門新聞は政府統制外にあるが、（08／8／7／夕）
（24）高校教育課程では地理歴史科に重点が置かれ、公民科はいわば「脇」の位置にある。（08／7／17／朝）
（25）苦難と幸せはいつも隣り合わせにあると思っていた方が、生きていく上で気が楽だと思います。（08／11／28／夕）
（26）言葉は民族の基盤にあるのだ。（08／4／22／朝）
（27）小林誠さん、益川敏英さんは、名古屋大理学部で坂田昌一教授（1911〜70年）と門下生が築いた「坂田学派」の系譜にある。（08／10／8／夕）

抽象場所型のBに用いられる名詞は、これらの例のように「中」「下」「上」「外」「脇」「隣り」などの空間を表す要素が転用されたものであることが多いが、（15）「構想」、（17）「案」、（26）「基盤」、（27）「系譜」のように抽象的な名詞の例もある。

二・三　状況型

位置項Bが抽象的な名詞であるものの中には、次のようにBがAに関する何らかの一時的な状況を表すものもある。これを「状況型」と呼ぶ。

（28）住民投票や情報公開に見られるように、地方自治は転換期にある。（02／1／28／朝）
（29）いま街はひな祭りを前に1年で最も忙しい時期にある。（01／2／1／夕）
（30）ソ連はいま崩壊の過程にある。（91／4／19／朝）
（31）企業の海外生産はさらに拡大の方向にある。（96／5／14／朝）
（32）だが、靴は汚れる運命にある。（99／11／8／朝）
（33）共和党は恒久減税を通じた景気活性化を主張する傾向にある。（09／2／1／朝）
（34）琵琶湖の水位は依然低い状態にある。（94／9／20／朝）
（35）民主党は大きなピンチにある。（10／6／4／夕）
（36）まだ余震活動は高いレベルにある。（11／3／25／朝）
（37）日本のサラブレッドは今や世界クラスにある。（11／5／22／朝）

（28）〜（30）はその変化の中のある局面を示し、（31）〜（33）はその変化・動作の方向や趨勢を示し、（34）〜（37）はその状態や動きの程度・段階を示している。これらはAの一時的な状況をBで表す関係にあるので「状況型」と呼ぶ。但し、（32）（33）は「靴」「共和党」について「汚れる」「景気活性化を主張する」という一時的な状況を「運命」「傾向」という属性として持つという関係を表す点で他と異なるが、状況を表す面があることに変わりはないので、ここに含める。[注4]

（28）〜（37）が抽象的な場所表現として成り立つのは、ある部分を切り取る表現だからではないかと考えられる。ここで「ところ」という名詞を参照すると、これが抽象化した「テキストのわからないところを質問する」のような表現は、「テキスト」の中で「わからない」

部分を取り出すことによって成り立っている（田窪一九八四＝二〇一〇：122）。それと同様に、（28）以下の所在文も部分を切り出した表現であると理解できる。（28）～（30）は時間的な流れの中の一部であり、（31）～（33）は様々な可能性のある「方向・傾向・運命」の中で他ではなくその「方向・傾向・運命」であり、（34）～（37）は程度・段階のスケールの中の一つというように見ることができる。

二・四　周辺要素型

次のようにBが副詞的な要素であるタイプもある。

（38）全国に信金は282、信組は164ある。（量）　（08／1／31／朝）

（39）選挙人名簿は当時、A4判用紙約600枚分もあり、事務が滞ることが多かったため、（量）　（02／9／4／夕）

（40）定年後の人生は20～30年ある。（時間量）　（08／10／12／朝）

（41）地下は100階まであるという。（範囲）　（98／8／22／夕）

（42）軍は国民とともにあると表明して中立を保った。（共同者）　（08／9／4／朝）

（43）「アートは心のためにある」展：UBS所蔵作品を展示―東京・森美術館（目的）　（08／2／18／夕）

（44）「信号はなぜあるのか　信号がないと交通事故にあうから」。（理由）（08／4／11／夕）

それぞれ破傍線部は括弧内に示した意味を表す。これらのBは文事態の周辺的な要素なので、「周辺要素型」と呼ぶ。「量、時間量、範囲」という量的なありようを表すもの、あるいは「共同者」、あるいは「目的、理由」というように、意味的にはかなり雑多である。にもかかわらず、これらをひとまとめにするのは、これらに対応する存在文を想定してみると、位置項が任意要素にしかならないという点で共通するからである。このことは三・三節で見る。

二・五　上位型

二・四節までに見た所在文は、位置項Bが「場所」や「時間」、「抽象的な場所」や「一時的な状況」、および、周辺的要素の種々のものというもので、Bの名詞がそれぞれの意味的な特徴を持つものであった。一方、この二・五節～二・七節のタイプは、存在物項Aとの関係において位置項Bが決まるものである。

本小節の「上位型」というのは、AがBの部分集合（あるいは要素）をなす関係、つまり、BがAの概念上の上位に属すると見ることができるタイプである。

（45）米国は、人種のるつぼで、昔からいる人と新しく来た人の衝突は社会現象としてある。　（92／3／2／朝）

（46）しかし今日、水資源の確保は世界的な難題としてある。　（98／5／30／朝）

（47）戦後、家庭科は従来の家事・裁縫教育ではなく、男女一緒に学ぶものとしてあった。　（97／5／16／朝）

これらは、「社会現象」の一つとして「昔からいる人と新しく来た人の衝突」が、「世界的な難題」の一つとして「水資源の確保」が、「男女一緒に学ぶもの」の一つとして「家庭科」が存在するという関係を形成している。

上位型の所在文は、「AはBとしてある」とトシテ格を取るのが特

徴である。後述するように、対応する上位型の存在文は、「Bには/としてはAがある」という形で、ニ格も用いられる。所在文の場合にニ格が用いられない理由は、今のところ不明としなければならない。

二・六　関係基体型

次のAは何らかの関係を担う名詞で、単独では意味的に自立せず、その関係がBで補充されている。

（48）やはり英国建築のおもしろさは|伝統建築|にある。（98/8/14/夕）

（49）常電導のリニアモーターカーは中国・上海などで実用化されているが、技術的優位性は|超電導|にあるようだ。（10/10/28/夕）

（50）チベットの民族文化の独自性は|宗教|にある。（10/2/21/朝）

「おもしろさ」「技術的優位性」「独自性」というのは何かの事物に伴う評価や性質である。その関係は、（48）で言えば、「（英国建築における）伝統建築のおもしろさ」などのように連体修飾構造でも表し得るが、「（英国建築の中で）伝統建築にはおもしろさがある」のように存在文でも表し得、そして、上記のように所在文でも表し得るのである。このようにAが関係を表し、Bがその関係の基体を表すタイプを「関係基体型」と呼ぶことにする。

このタイプでは、Bが人や組織という場合もある。

（51）薬害の一義的な責任は|製薬会社|にある。（08/9/29/朝）

（52）まさに、勢いは|ダイエー|にある。（98/9/17/朝）

（53）〝メークミラクル〟を語る資格は、その後も5勝10敗と千鳥足の巨人より横浜|にある。（97/7/17/朝）

（54）決定の役割は|トップ|にある。（08/11/9/朝）

（55）勝利は、必ず|ドミトリー（Dmitrij）・ショスタコービチ|にある。（96/8/7/夕）

「責任」は必ず誰かの「責任」であり、「勢い」も誰かの「勢い」であるなどというようにAが関係を担い、Bがその基体というのは同じである。これらの例は所有関係と呼ばれるものであるが、[注5] 本稿はBにどのような名詞が用いられるか、BがAとどのような関係にあるかという観点で命名しており、それを明示的にするために、熟さないが、「関係基体」という呼び名にする。なお、このタイプには、カラ格を取る例もある。

（56）寄付の依頼は|『ジョン万次郎の会』の事務局|からあった。（94/6/2/朝）

二・七　内容型

関係名詞Aを補充するタイプの所在文には、Aの表す事物に対してBがその内容を表すという関係にあるものもある。

（57）問題が起きた原因は、プロ野球界の|「商慣習」|にある。（08/2/22/朝）

（58）爆竹の由来は|新年の邪気払いに|あったという。（93/12/17/夕）

（59）克服の契機は|オスカー・ワイルド作の「サロメ」に|あった。（07/1/17/朝）

（60）どうすれば、あのカモシカのような足を作れるのか。答えは、正しいぶつかりげいこ|にある。（98/5/28/朝）

（61）第二次大戦以来、「最も成功した二国間同盟の一つ」とされる日米同盟の目的は「両国民の保護と安全」にある。（01／9／19／朝）

（62）不拡散の問題を解決する最も確実な方法は、まず大量破壊兵器の削減、軍縮にあるからである。（92／7／5／朝）

（57）で言えば、「問題が起きた」ことの「原因」の内容が「プロ野球界の「商慣習」」という関係にあり、それは「プロ野球界の「商慣習」という原因」のように内容補充の連体修飾節構造を形成できることからもわかる。このタイプを「内容型」と呼ぶ。（57）～（62）は、Aの主名詞が修飾部分との間に相対補充修飾の関係にあり、「原因」「由来」「秘密」「契機」「答え」という因果関係や「目的」「方法」という目的関係を成している。内容型には、次のように、主名詞が修飾部分の性質や評価（（63）～（66））、思考や感情（（67）～（69））などを表すものもある。

（63）アトキンソンの才能は速さだけでなく、適応力の高さにもある。（05／4／8／朝）

（64）一向衆の強さは、ビシッとした組織力にあった。（00／8／20／朝）

（65）（将棋で）穴熊の利点は、相当な無理も利くところにある。（98／9／17／朝）

（66）私たちの社会の不幸はそこにある。（95／4／24／朝）

（67）形勢我に利あらずと見た丸山八段の狙いは、ここにあった。（00／6／1／朝）

（68）国土の荒廃はカンボジア以上といわれるだけに、苦労は選挙監視よりも、むしろ衣食住にあったようだ。（92／10／8／朝）

（69）懸念はインフレにある。（02／4／22／朝）

Aの名詞によっては、次のように内容型と関係基体型の両方が可能なものもある。

（70）航空機の優位性は時間にある。（内容型）

（71）時間的な優位性は航空機にある。（関係基体型）

（72）この絵の独自性は構図の取り方にある。（内容型）

（73）構図の取り方という点での独自性はこの絵にある。（関係基体型）

「航空機の、時間という優位性」「この絵の、構図の取り方という独自性」という関係があり、どちらの要素が焦点に来るかによって内容型か関係基体型になるという関係にある。

なお、内容型や関係基体型の例は、抽象場所型と相乗りになり得る。例えば（50）や（64）の例のBに「の中」を付加したものは抽象場所型としても理解できる。

（50′）チベットの民族文化の独自性は宗教の中にある。（関係基体型かつ抽象場所型）

（64′）一向衆の強さは、ビシッとした組織力の中にあった。（内容型かつ抽象場所型）

三　存在文との対応関係

三・一　対応の可否

場所型の所在文「AはBにある」と存在文「Bに（は）Aがある」とは対応し、（1）「時計は机の上にある」を（2）「机の上に（は）時計

がある」に容易に置換できる。しかし、所在文の種類によっては、そのような対応関係が成り立たなかったり、対応関係が異なっていたりする。以下、その対応関係のありようを見ていく。

なお、ここで、「対応する・しない」「置換できる・できない」というのは、「AはBにある」の名詞句AとBを用いて焦点の位置を入れ換え「BにはAがある」という文が形成できる、あるいは、その逆、ということである。その文が用いられる文脈は考慮していない。当然ながら、次の文脈の下では存在文は不自然である。

(74) a 時計はどこにあるの？――時計は机の上にある。
　b 時計はどこにあるの？――*机の上には時計がある。

また次も当然ながら、前提の位置には不定の名詞が用いられない。

(75) a 時計はどこにありますか。
　b *どこには時計がありますか。

「対応する」というのは、このようなことに関わらないものとする。

三・二　関心のありよう

場所型と同様、時間型は対応が容易である。

(76) a 金曜日には連絡がある。
　b 連絡は金曜日にある。

一方、抽象場所型、上位型、関係基体型は、対応する場合と所在文の方が成り立たない場合とがある。次は、所在文も存在文もともに成り立つ例。

(77) a 憲法の規定には表現の自由がある。
　b 表現の自由は憲法の規定にある。　（抽象場所型）

(78) a 春の行事（には／としては）遠足がある。
　b 遠足は春の行事としてある。　（上位型）

(79) a この作品には独創性がある。
　b 独創性はこの作品にある。　（関係基体型）

(80) a 彼には問題がある。
　b 問題は彼にある。　（関係基体型）

これに対して、次は所在文が不自然になる例である。

(81) a 私の記憶にはそういう光景がある。
　b *そういう光景は私の記憶にある。　（抽象場所型）

(82) a 事件の背景には貧困がある。
　b *貧困は事件の背景にある。　（抽象場所型）

(83) a 外国暮らしの苦労として日々の食事があった。
　b *日々の食事は外国暮らしの苦労としてあった。　（上位型）

(84) a オリンピックへの課題として交通網の整備があった。
　b *交通網の整備はオリンピックへの課題としてあった。　（上位型）

(85) a 彼には特技がある。
　b *特技は彼にある。　（関係基体型）

(86) a この作品には深い悲しみがある。
　b *深い悲しみはこの作品にある。　（関係基体型）

(77)～(80)と(81)～(86)の相違は、ガ格項Aがニ格項Bに対する前提として立ちやすいか否か、言い換えれば、Aからどのようなが存在するかという関心が喚起されるか否かということにある。(83)で言えば、aのように「外国暮らしの苦労」としてどういうこ

とがあるかという関心は喚起されやすいが、bのように「日々の食事」について、それが「外国暮らしの苦労」としてあるのか他の何かとしてあるのか、ということが問題になることは普通はない。それに対して、例えば（77）において、aのように「憲法の規定」にどんなことがあるのかという関心が喚起されることも、bのように「表現の自由」がどういう所に規定されているのかという関心が喚起されることも、どちらも自然なことであり、存在文も所在文も成り立つのである。

このように関心を抱きやすいか否かということは相対的なことで、文脈や場面状況に左右されることが多い。次の（87）は所在文が成り立ちにくいが、（88）のようにBの指定性が強ければ適格性が高くなる。

（87）a 花子には孫がある。
　　b *その孫は花子にある。
（88）孫は、上の息子にはなく、下の息子の方にある。
　　（関係基体型）

（81）〜（86）の例の中でも、次のように適格性が高くなることがある。

（′83）b 日々の食事は外国暮らしの苦労の一つとしてあった。
（′86）b 深い悲しみはこの作品にこそある。

（′83）bは、（83）bとは異なり、種々の「苦労」の中の「一つ」という指定である。

また、場所型と時間型において対応が容易なのは、場所や時間は存在する事柄の内容から独立しているため、その場所や時間においてどういう事柄が存在するかという関心も、その事柄がどこにいつ存在するかという関心も、どちらも自然に成り立つからだと考えられる。

次小節以降は、周辺要素型、内容型、状況型の対応関係をそれぞれ見る。これらは、それぞれに事情が異なる。

三・三　周辺要素型における対応

周辺要素型の場合は、所在文は存在文に置き換え得るが、Bが任意要素になる。

（89）a 公演は20日間ある。
　　b 20日間公演がある。
（90）a 未練はたっぷりあった。
　　b たっぷり未練があった。
（91）a 住宅補助制度は低所得者のためにある。
　　b 低所得者のために住宅補助制度がある。

Bが任意要素であると言うのは、これらのbの存在文が単独では落ち着きが悪く、

（′89）b この町では、20日間公演がある。
（′90）b 私には、たっぷり未練があった。
（′91）b この県では、低所得者のために住宅補助制度がある。

のように何らかの前提要素（（′89）b（′91）bでは場所、（′90）bでは関係の基体）を加えると落ち着きが良くなるからである。この周辺要素型の所在文「AはBφある」に対しては、「BφAがある」では必須要素が揃わず、むしろ存在文「Cには／では、ABφがある」が対応すると言わなければならない。（′89）b（′91）bは場所型の存在文に属し、（′90）bは関係基体型の存在文に属する。つまり、上のような言い

換えはできるものの、周辺型の存在文というタイプは存在せず、その点で、対応は成り立たないということになる。[注6]

なお、二節において、同じ時間的な要素の中で、(8)～(12)を時間型とし、(40)を周辺要素型として区別したのも同様のことで、対応する存在文において、前者は必須性があり、後者にはないからである。類例を挙げれば、

(92) a オリンピックは、あすからあります。
　　b あすからオリンピックがあります。
(93) a オリンピックは、2週間あります。
　　b オリンピックが2週間あります。

時間型所在文(92)aに対応する時間型存在文bは単独で自然だが、周辺要素型所在文(93)aに対応するbは「8月は」のような要素を補わないと落ち着かない(つまり、(93)bは時間型存在文に属する)。[注7]

三・四　内容型における対応

内容型の所在文「AはBにある」は、対応する存在文「BにはAがある」が成り立たない。

(94) a 事故の原因は過積載にある。
　　b *過積載には事故の原因がある。[注8]

一方で、この内容型の所在文は、「A(には/としては)Bがある」という存在文と対応する。

(94) c 事故の原因(には/としては)過積載がある。

二・七節の例についても、いくつか置き換えた例を示す。

(58) 爆竹の由来(には/としては)新年の邪気払い(ということ)がある。

(63′) アトキンソンの才能(には/としては)速さだけでなく、適応力の高さもある。

(64′) 一向衆の強さ(には/としては)、ビシッとした組織力(というもの)があった。

これらの「A(には/としては)Bがある」という存在文は、(78)a「春の行事には遠足がある。」と同じで、上位型の存在文である。(78)が「遠足という春の行事」と言えるのと同様、「過積載という事故の原因」「信念の邪気払いという爆竹の由来」などのように下位と上位の関係にあることが確認できる。[注9]

三・二節のように、上位型の存在文は、関心のありようによって、上位型の所在文と対応することもあり得た。

(94) d 過積載は事故の原因としてある。単なる誘因としてあるのではない。

上位型と内容型の関係をまとめると次のようになる。

(95) a 内容型所在文「上位項Aは下位項Bにある。」
　　将来の懸念はインフレにある。
　　b ×内容型存在文「*下位項Bには上位項Aがある。」
　　*インフレには将来の懸念がある。
　　c 上位型存在文「上位項B(には/としては)下位項Aがある。」
　　将来の懸念(には/としては)インフレがあった。
　　d 上位型所在文「下位項Aは上位項Bとしてある。」
　　インフレは将来の懸念としてある。

d→c、つまり、上位型所在文の焦点の位置を入れ換えると上位型存

在文になり、また、a→c、つまり、内容型所在文のガ格とニ格を入れ換えると上位型存在文になる。ここで、内容型の場合は、aの所在文が成り立ってbの存在文が成り立たないというのはどういうことであろうか。

他の型を参照すると、

(96) a 教会は丘の上にある。（場所型所在文）
b 丘の上には教会がある。（場所型存在文）
c*丘の上は教会にある。
d*教会には丘の上がある。

(97) a 入学式は4月1日にある。（時間型所在文）
b 4月1日には入学式がある。（時間型存在文）
c*入学式には4月1日がある。
d*4月1日は入学式にある。

aとbのように焦点の位置の入れ換えは成り立つが、abとcdのようにガ格とニ格の入れ換えは成り立たない。「丘」と「教会」、「4月1日」と「入学式」において、後者が存在物項で、前者がその場所や時間という位置項になるという関係は明らかである。

上位型においても、これを例えば「瓶の中にお酒がある」のような容器と内容物の関係に類比して考えれば、上位項が位置項に相当し、下位項が存在物項になるのは自然である（(95) cdが成り立つ）。とすると、その反対の、下位項が位置項で上位項が存在物項という内容型は特異なのであり、(95) bのように成り立たないのは当然と言える。それにもかかわらず、(95) aが成り立つのは、このニ格項が別の意味で場所的性格を持っていると考えなければならない。おそらく、それはこのニ格項にガ格項の部分を指定するという性格があるためであろう。この文には、「将来の懸念」が可能性としていろいろ想定できる中で、その文脈における「将来の懸念」は他ならぬ「インフレ」であるという指定的な関係がある。部分を切り取ることによって場所的性格が生まれるのは、二・三節の状況型所在文にも見られたことである。状況型の場合は時間や程度などの面での部分関係、内容型所在文の場合は集合の中での部分関係という相違はあるが、所在文が成り立つ契機として、共通する性格を持っているということができる。

三・五　関係基体兼内容型

所在文「AはBにある」に対応する文として、存在文「BにはAがある」（焦点位置の入れ替え）、存在文「A〔には／としては〕Bがある」（ガ格項とニ格項の入れ替え、トシテも可）があり、三・四節のように、内容型の場合は、前者は成り立たず、後者が上位型存在文として成り立つのであった。その例を改めて示す。

(94) a 事故の原因は過積載にある。（内容型所在文）
b*過積載には事故の原因がある。（×内容型存在文）
c 事故の原因〔には／としては〕過積載があった。（上位型存在文）

(95) a 将来の懸念はインフレにある。
b*インフレには将来の懸念がある。
c 将来の懸念〔には／としては〕インフレがあった。

(98) a 会議の目的は防災方法の再検討にある。
b*防災方法の再検討には会議の目的がある。

c　会議の目的{には／としては}防災方法の再検討がある。

ところが、次はbの例も成り立つ。

(99) a　この作品の独自性は奔放な文体にある。
　　b　この奔放な文体にはこの作品(ならでは)の独自性がある。
　　c　この作品の独自性{には／としては}奔放な文体がある。

(100) a　人の幸せの基盤は、良い人間関係にある。
　　b　良い人間関係には、人の幸せの基盤がある。
　　c　人の幸せの基盤{には／としては}、良い人間関係がある。

(101) a　事件解決の糸口は、DNA鑑定にあった。
　　b　DNA鑑定には、事件解決の糸口があった。
　　c　事件解決の糸口{には／としては}、DNA鑑定があった。

(99)〜(101)のbは、ガ格項Aが関係(性質や原因・根拠)を担い、ニ格項Bがその基体としてあるという関係基体型の存在文である。aの所在文が関係基体型bと上位型cの両方の存在文に対応するというのは、AとBの関係において、BがAの関係の基体であるという把握も、BがAの内容(AがBの上位)であるという把握も、どちらも可能だということであろう。(99)で言えば、「この作品の奔放な文体」に「この作品の独自性」という性質があるという捉え方と、「この作品の独自性」の内容として「この作品の奔放な文体」があるという捉え方が両立するのである。したがって、(99)〜(101)のaは、それぞれ、bに対応するものとしては関係基体型の所在文であり、cに対応するものとしては内容型の所在文であると言うことができる(「関係基体兼内容型」所在文と呼ぶ)。他方、(94)(95)(98)においては、そのような二つの捉え方ができない。例えば(94)において「過積載」は「事故の原因」の内容であって、関係の基体ではない。したがって、(94)(95)(98)のaはcに対応する内容型所在文としてのみ捉えられるのである。

三・六　状況型における対応

状況型の所在文の存在文との対応関係については、「AはBにある」を「BにはAがある」と焦点位置を入れ替えた存在文の例は、次のように成り立たない。

(102) a　火山活動は高いレベルにある。
　　b　*高いレベルには火山活動がある。

(103) a　日本は長い不況のトンネルにある。
　　b　*長い不況のトンネルには日本がある。

(104) a　わが社の業績は回復傾向にある。
　　b　*回復傾向にはわが社の業績がある。

(102)(103)(104)は、A「火山活動」「日本」「わが社の業績」がB「高いレベル」「長い不況のトンネル」「回復傾向」という一時的な状況にあることを示すが、このような一時的な状況に対して、どんな事物がその状況に該当するかを問題にするということが成り立ちにくいのだと考えられる。ただし、

(102′) b　何が高いレベルにあるかというと、火山活動が高いレベルにある。

(103′) b　他の国ではなく、日本が長い不況のトンネルにある。

(104′) b　他の会社でなく、わが社の業績が回復傾向にある。

のように、「AがBにある」という語順で「Aが」に焦点がある場合

には成り立つ。上に見た場所型、時間型、抽象場所型、上位型、関係基体型の存在文においては、「BにはAがある」も「AがBにある」もどちらも成り立つことであり、状況型においてこのような制約が存在する事情は不明である。

他方、状況型所在文「AはBにある」のニ格とガ格を入れ換えた存在文「A(には／としては)Bがある」は、次の(102)c～(104)cのように成り立たないことが多い。

(102) c*火山活動には高いレベルがある。
(103) c*日本には長い不況のトンネルがある。
(104) c*わが社の業績には回復傾向がある。

しかし、中には次のように対応が成り立つ例もある。

(105) a 靴は汚れる運命にある。(＝(32))
　　c 靴には汚れる(という)運命がある。

このcは関係基体型存在文に属し、ガ格項B「汚れる運命」が関係を担い、ニ格項A「靴」がその関係の基体である。その点で言えば、(102)c～(104)cもB「高いレベル」「長い不況のトンネル」「回復傾向」が関係を担い、A「村」「火山活動」「わが社の業績」がその関係の基体であるということもできる。にもかかわらず、(105)cが成り立って(102)c～(104)cが成り立たないのは、後者は、Bが連続的な程度量を表すものであるため、一つの存在物として捉えられにくいからではないかと考えられる。それに対して前者のB「運命」は一つのまとまった存在物と捉えることができる。(注10)

四．まとめ

以上をまとめると、次の表のようになる。

所在文の諸タイプの中で、場所型・時間型は事物Aがどこにいつ存在するかという、Aの具体的な場所・時間への位置づけを表すもの、抽象場所型以下は、Aがどのようなものとして存在するか、抽象的な位置づけを表すものである。また、二・五で言及したように、Bによる区分も可能で、場所型・時間型・抽象場所型・状況型はBに用いられる名詞が、場所・時間・抽象場所・一時的な状況というように、それぞれの特徴を持つ。それに対して、上位型・関係基体型・内容型(および関係基体兼内容型)は、Aとの関係によってBが決まる。すなわち、上位型は概念的にBがAの上位にあり(AがBの部分集合または要素)、内容型はその逆でAがBの上位にある。また、関係基体型は関係名詞Aとその関係の基体Bというものであった。

本稿は所在文を基として、対応する存在文がどうであるかという観点からの分類・考察であった。一方で、「神はある。」のように、存在文は成り立っても所在文には対応しないというものもある。したがって、存在文を基にした考察も必要であり、それは丹羽(二〇一五)で述べた。(注11)

また、所在文がこの表のように分類できるとして、では、なぜこのような範囲で成り立つのかという問題について、ここで述べる用意はない。おそらく、所在文のみで決まることではなく、他の構文との分担や競合ということも関係するであろう。抽象的な所在文は事物がどのようにして存在するかということを表すと述べたが、このような存

表

所在文「AはBにある」の種類 ＼ 対応する存在文	「Bに(は)Aがある」との対応（焦点位置の入れ換え）	「Aに(は)Bがある」との対応（ガ格とニ格の入れ換え）
場所型 ニ・デ	○	×
時間型 ニ・φ・カラ・マデ	○	×
抽象場所型 ニ	△	×
状況型 ニ	△（「Aが(焦点)Bにある」のみ）	△（関係基体型）
周辺要素型 φ・カラ・マデ・トトモニ・タメニ　など	×（Bが任意要素としては成り立つ）	×
上位型 トシテ	△（ニ・トシテ）	×
関係基体型 ニ・カラ	△（関係基体型）	×
関係基体兼内容型 ニ	○（関係基体型）	○（上位型）
内容型 ニ	×	○（上位型）

※「Bに」の部分は、片仮名で示したように、「に」以外のことも多い。
※○は置換が容易なもの、△は置換できる場合もそうでない場合もある場合。
また、丸括弧内のように、対応の仕方が個々に異なるものもある。

在様態はコピュラ文でも表し得ることである。例えば、「原因は過積載にある。」という内容型所在文は、「原因は過積載である。」という形でも表すことができる。所在文あるいは存在文とコピュラ文との関係は、今後の課題としなければならない。

〈注〉

（注1）所在文でニ格が前置されるものもある。

［1］（どこに時計があるかというと）机の上に時計がある。

一方、存在文には、述語の「ある／ない」に焦点があるものもある。

［2］机の上に時計はあるのだろうか、ないのだろうか。

本稿は、存在表現の中で（1）や［1］のようなニ格項に焦点があるタイプのものを「所在文」、（2）のようなガ格項または文全体、および、［2］のような述語に焦点があるものを「存在文」とする。

先行研究において、「存在」「所在」という用語の使い方はまちまちである。例えば（注2）の西山論文は、存在表現全体を「存在文」と呼び、その下位分類の一つとして「AはBにある」タイプのものを「所在文」と呼ぶ。日本語記述文法研究会（二〇〇九：172–175）は、全体を「所在構文」と呼び、その中で、「存在型構文」と「所在型構文」に分ける。他方、新屋（一九九四）は「存在文」の下位類の一つである「具体的な存在」を表すものの中のさらなる下位類として、具体的な空間を占めることを表すものを「所在」、一定の性質を持ったものが存在することだけを表して

空間表現を要求しないものを「存在」と呼ぶ。

（注2）例えば、西山（一九九四：116、二〇〇三：394）は、「存在文」を次のように分類する。

Ⅰ　場所表現を伴うタイプ

（i）場所存在文　机の上にバナナがある。（中立叙述）

（ii）所在文　おかあさんは、台所にいる。

（iii）所在コピュラ文　おかあさんは、台所です。

（iv）指定所在文　その部屋に誰がいるの？…洋子がいるよ。（総記）

（v）存現文　おや、あんなところにリスがいるよ。（中立叙述）

Ⅱ　場所表現を伴わないタイプ

（i）実在文（間スペース対応存在文）　ペガサスは存在しない。

（ii）絶対存在文　太郎の好きな食べ物がある。

（iii）所有文　山田先生には借金がある

（iv）準所有文　フランスには国王がいる

（v）リスト存在文　母の世話をする人はいないよ。……洋子と佐和子がいるじゃないか。

「場所表現を伴うタイプ」の中で「所在文」を独立させることは妥当だが、一方で、「場所表現を伴わないタイプ」の中で（3）のような文をどのように位置づけるのか明らかではない。

（注3）実例は、『CD―毎日新聞（データ版）』による。出典がない例は作例。

（注4）一節の（3）「妻は深い眠りの中にあった。」も状況型の例である。「～中にある」という形は二・二節の抽象場所型に多いが、（3）は「深い眠りの中にあった」が「妻」の一時的な状況を表している。これは三節で見る存在文との対応関係を参照するとはっきりする。抽象場所型の例えば（16）「そのひな型は物語の中にある。」は「物語の中にはそのひな型がある。」という存在文に転換できる（三・二節）が、状況型の（3）は「*深い眠りの中には妻があった。」のようには転換できない（三・六節）。

（注5）（注2）のように西山（一九九四、二〇〇三）の分類では「所有文」（Bが人の場合）と「準所有文」（Bが事物の場合）という呼び分けがなされていたが、西山（二〇一三）では「準所有文」が「所有文」の中に統合されている。

（注6）aの所在文でも、

（′89）a この町では、公演は20日間ある。

（′90）a 私には、未練はたっぷりあった。

（′91）a この県では、住宅補助制度は低所得者のためにある。

のように前提要素を加えることもできるが、（89）a～（91）aと同様、「AはBある」だけで前提と焦点の要素は揃っており、周辺要素型に属することに変わりはない。

（注7）とはいえ、時間型と周辺要素型は連続的な面がある。次の「毎年4月」「毎日」はともに頻度を表す例であるが、

［1］a この町の自治会の総会は毎年4月にある。

b 毎年4月にこの町の自治会の総会がある。

［2］a 野球の練習は毎日あった。

b　毎日野球の練習があった。

［1］bはこれ単独でも落ち着くが、［2］bは「その頃は」などの要素を補って理解するのが自然である。時間的な要素を含むものでも、自立性が高いものも低いものもあるのである。

（注8）次は（94）bに似るが、aのニ格項が前置された所在文である。

（94）a（どこに事故の原因があるかというと）過積載に事故の原因がある。

（注9）「上位型」の存在文は、高橋・屋久（一九八四：11）の「メンバーとしての存在」を表すもの、また、西山（一九九四：136、二〇〇三：412）の言う「リスト存在文」に当たる（金水二〇〇六：37も参照）。

（注10）（102）cに対して、次の［1］はガ格項を「レベルの変動」に換えたものである。

［1］火山活動にはレベルの変動がある。（関係基体型存在文）

これが成り立つのは、「高いレベル」という相対的な状況と異なり、「レベルの変動」は一つの存在物として捉えやすいためであろう。ただし、「レベルの変動」は状況ではないため、［2］は成り立たない。

［2］*火山活動はレベルの変動にある

また、［1］の焦点位置を入れ換えた［3］も成り立たない。

［3］*レベルの変動は火山活動にある。

［1］が成り立ち［3］が成り立たないのは、三・二節の（85）a（86）aと同じタイプである。

（注11）（102）b～（104）bの「AがBにある（Aに焦点）」というタイプの存在文の存在に思い至ったのが、丹羽（二〇一五）の脱稿後であったため、上記論文には「状況型存在文」が限定的な形で存在するということが抜け落ちている。ここに訂正をする。

〈引用文献〉

金水敏（二〇〇六）『日本語存在表現の歴史』（ひつじ書房）

新屋映子（一九九四）「存在文における「場所ニ」と「場所デ」」『津田塾大学紀要』26

高橋太郎・屋久茂子（一九八四）「「～がある」の用法」『国立国語研究所報告79　研究報告集5』

田窪行則（一九八四）「現代日本語の「場所」を表す名詞類について」『日本語・日本文化』12（大阪外国語大学）、同（二〇一〇）『日本語の構造―推論と知識管理―』（くろしお出版）

日本語記述文法研究会（二〇〇九）『現代日本語文法②』（第3部格と構文）（くろしお出版）

西山佑司（一九九四）「日本語の存在文と変項名詞句」『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』26

西山佑司（二〇〇三）『日本語名詞句の意味論と語用論』（ひつじ書房）

西山佑司（二〇一三）「第Ⅲ部　総論」、「第11章　名詞句の意味機能から見た存在文の多様性」同編『名詞句の世界―その意味と解釈の神秘に迫る―』（ひつじ書房）

丹羽哲也（二〇一五）「存在文の分類をめぐって」『国語国文』84巻4号（木田章義教授退職記念特輯号）

（本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（C）課題番号 24520504 の研究成果の一部である。）